

～なぜお坊さんになったのか～

仏教に最初に出会ったのは、2000年頃です。宗旨が浄土真宗で同じだからと高校の同級生から築地本願寺の仏教壮年会に入会をすすめられたのがきっかけです。仏教壮年会の先輩から、仏教について学ぶには、中央仏教学院の通信教育があるよと教えられ、学習課程で3年間、専修課程で3年間学びました。

専修課程を卒業し得度習礼を受けるときは、KDDIを退職し何をしようかなと悩んでいたころなので、お坊さんになるのもいいかなと軽い気持ちでした。京都の西山別院修行道場で、13名の仲間と一緒に僧侶になるための得度習礼を受けました。ご門主から度牒（僧侶であることを証明する文書）をさずかり2013年（平成25年）11月13日お坊さんになりました。68歳でした。現在大阪教区都島榎並組の光源寺の衆徒をしています。また築地本願寺の仏教壮年会のお世話をしています。得度式では、僧侶の心得（得度誓約）を暗記させられます。僧侶になって13年ですが僧侶としての自覚がないせいか、煩惱にまみれた生活を送っています。

「僧侶の心得」

終身僧侶の本分を守り、勉学布教を怠らないこと。

和合を旨とし、宗門の秩序を乱さないこと。

仏恩報謝の生活を送り、心豊かな社会の実現に貢献すること。

～後生の一大事を心にかけて～

後生とは後にくるべき生涯、一大事とは最も重要なことの意。転迷開悟のことで、生死の問題を解決して後生に浄土に往生するという人生における最重要事をいう。

蓮如上人の『御文章』第5帖第16通には「たれの人もはやく後生の一大事」を心にかけて、阿弥陀仏を深くたのみまいらせて（注釈版聖典1203ページ）等とあります。御文章第5帖第16通白骨章の大意を以下に述べます。

人の“いのち”のありさまを、心をしずめて考えてみますと、まことにはかなく、まるで夢、幻のような一生といわねばなりません。

ですから、「今に至るまで、人が一万年の寿命を得たということは、聞いたこともありません。一生は「アット」という間に過ぎ去ってしまいます。だれが百年“いのち”を保ったでしょうか。死の訪れについては、自分が先なのか、他人が先か、また今日なのか、明日なのか・・・を知ることができません。人の“いのち”の終わってゆくようすは、まさに草の根もとや葉末に宿った露や雫が、先を争うように消し去るようなものである・・・」といわれています。

このように、朝に若々しく元気な人であったとしても、その夕暮れには白骨となってしまう身の上です。ひとたび無常の風が吹き来たったならば、両眼はたちまちに閉じて二度と開かず、ひとたび息が絶えたならば、若くはつらつとした顔ばせも、むなしく変じて華やかなありさまを失ってしまいます。そうなれば、家族や親族がいくら歎き悲しんでも、どうすることもできません。

とって、いつまでも遺体を屋内にとどめておくこともできませんから、野外に送って火葬に付したならば、後には白骨が残るのみであります。「哀れなこと」といくらいっても、その深い悲しみをはらすことはできません。

人の“いのち”のはかなさは年齢を問いません。だからこそ年齢に関わらず、誰もが一時も早く後

生の一大事に気づいて、阿弥陀仏を深く頼みとして、念仏を申す身となることが大切なのです。
人の世のはかないことは、老若にかかわらないことですから、だれもみな後世の浄土往生というも
っとも大事なことを心にかけて、阿弥陀如来を深くたのみたてまつって、念仏しなければなりません。

後生の一大事とは「今ここ」の「この私」一人の問題である。一大事の「一」とあるが如く、唯一無二で、全くとりかえしのつかない問題である。この後生の一大事の答えが「南無阿弥陀仏の六字」の法です。

では、どうすれば後生の一大事を解決できるのかというと、「他力の信心を決定すべし」と教えられています。

信心決定すると、地獄に堕ちてながく苦しまねばならない後生の一大事が、極楽へ往って仏に生まれる一大事に切り替わります。だから、「弥陀の本願をたのみ、他力の信心を決定すべし」といわれているのです。

親鸞聖人のみ教えを通して、後生の一大事とは何か、何のために生きているのか、生死生きる道を心にかけて、むなしく終わらない人生を共に歩んでいきたい。



11月得度 受式記念 2013(平成25)年11月13日





